

『哲学の探求』第二十四号刊行にあたって

ここに上梓するのは、本年七月十三・十四日の両日山中湖畔の東海大学セミナーハウスにて開催された、第二十四回全国若手哲学研究者ゼミナール（通称「若手ゼミ」）においてなされた研究発表の集大成である。山間の必ずしも交通の便のよいとは言えない場所ながら、当日は延べ三十名もの参加者が集い、世を騒がせたオウム事件を受けてタイムリーなテーマで企画されたシンポジウムなどもあって、会場では熱気に包まれた活発な議論が繰り返された。理性的な討論を重んじる健全な合理主義が忌避され、感覚的なもの、あるいは超越的なものへの傾倒が若い世代の共感を集める昨今の時勢にあつて、いまなおこれだけの数の若手研究者が、哲学・社会学・教育学その他の分野から参集して同じ土俵で議論を闘わせる機会を共有することができたのは、〈稀有な〉という言葉が当てはまるほど誠に意義深いことであり、若手ゼミの将来に対しても主催者として心強い思いがする。

若手ゼミは、哲学・思想史を専攻する若手研究者が日頃の研究成果を発表し論じ合う場として、大学院生、O.D、教員を中心にほぼ三十歳代半ばまでの参加者によつて構成され、毎年一回、夏に一泊二日の合宿形式で開催されてきた。その歴史はもうかれこれ二十年以上にも及ぶ。若手ゼミの魅力は、権威主義を廃した開放的な雰囲気の下で心ゆくまで自由闊達に議論できること、そして日頃各人の属する専門分野の中での縦の関係には恵まれていても、同世代の他大学の様々な専門を持った研究者との横の交流を育む機会をともしれば欠きがちな若手研究者に、そうした交流の場を提供し得るといふ点にある。そのためかわれは「小さな学会」となることを拒否し、通常の学会では発表しづらい副専攻に関する研究報告、ないしは多少厳密性に欠けるが野心的な構想の開陳なども積極的に歓迎している。

われわれ哲学・思想研究者にとつての〈冬の時代〉は今後も当分続くであろうと思われるが、当ゼミの雰囲気と余熱をある程度とどめていられるであろう本誌が一人でも多くの方々の手に渡り、このユニークな哲学運動の輪がさらにいつそ大きく広がっていくことを心より願つてやまない。

一九九六年冬

第二十四回全国若手哲学研究者ゼミナール

世話人代表 松本 俊吉